記念講演 後藤新平と拓殖大学－自治五決に学ぶ（上）

学長　渡辺　利夫

後藤新平は日本の近現代史が生んだ希有の大いなる人物です。行政官僚としても政治家としても、藩閥や政党に頼ることなく、すくっとして一人立ち、この人のためなら力を惜しむことなく尽くそうと周辺に集う人々を決意させ、またその決然たる主張にこの政治家になら仕事を任せても心配はなかろう、国民にそう思わせる能力と権威を後藤は漂わせていたように思われるのです。

後藤の年譜をみると、一人の人間が一生涯を通じてどうしてこれだけ多くのことがやれるものかと思わされます。仕事の分野は呆れるほどの多岐に及んでいます。台湾総督府民生長官、初代満鉄総裁、第二次ならびに第三次桂太郎内閣の逓信大臣、鉄道院総裁、寺内正毅内閣の内務大臣、外務大臣、第二次山本権兵衛内閣の内務大臣、帝都復興院総裁、政界引退後は東京放送局（NHK）初代総裁、日本連合少年団（ボーイスカウト）総裁とつづいたのです。

後藤が台湾総督府民政局長（後に民生長官）として赴任したのが明治31年（1898）3月、拓殖大学の淵源・台湾協会学校が開設されたのが明治33年（1900）年9月です。ですから、台湾協会学校が開始された頃、後藤は台湾総督府民生長官として辣腕を振るっていたのです。

後藤が台湾に別れを告げたのが明治39年（1906）10月です。激務の疲れを癒す時間をほとんど与えられずに、同年11月には満鉄総裁に就任し、翌明治40年（1907）5月7日に満鉄総裁として初めて大連に上陸するというあわただしさでした。満鉄総裁はわずか2年に満たない短期間でしたが、大連や長春の都市開発などを中心に満州経営の基礎を固め、後藤が自ら抜擢、育成した中村是公に総裁を託して、明治41年（1908）6月に東京に帰着しました。同時に同年7月に組閣された第二次桂内閣の逓信大臣として入閣、鉄道院総裁をも兼務することになりました。

つづく第三次桂内閣、さらに大正5年（1916）10月に成立した寺内正毅内閣でも同地位を保ち、さらに外務大臣をも兼務したのであります。しかし、寺内内閣は大正7年（1918）年9月に総辞職、ここで後藤も大臣職を下りざるをえませんでした。

この辞任後は、後藤にとっては偶然のように訪れた公職のしばしの「空白期」でした。このゆとりの時期に後藤が東洋協会会長を引き受け、本学の第三代の学長にも就任したのです。後藤の学長就任は本学にとってはまことに幸運なことであったといわねばなりません。後藤の学長就任は大正8年（1919）2月のことでした。ちなみに後藤は昭和4年（1929）4月に没するまで、終生、本学の学長を務めたのであります。

政治的公職を離れて本学学長に就任したものの、その後なお後藤の声望は高く、つまり時代と社会は後藤を本学の学長のみにとどまらせておいてはくれませんでした。はやくも学長就任の翌大正9年（1920）12月には東京市長、大正12年（1923）9月1日正午直前に発生した関東大震災が東京を壊滅させ、新たに組閣された山本権兵衛内閣の内務大臣となり、帝都復興のための復興院を創設、自らが総裁となって陣頭指揮を執ることになりました。

かような次第でありますから、後藤は学長の仕事に専念できたわけではありません。しかし、後藤のような名望なる偉才を学長として戴いたことは、本学の学生や教職員にとっていかにも名誉であり誇りであったにちがいありません。

しかし後藤は、多忙の中にありながらも、本学の学生のことがつねに胸中にあって、その後藤の思いが学生にも伝わっていたのではないかと思われます。本学卒業の大先輩宮原民平氏は次①のように後藤のことを回想しています。

①●「伯は学生に対しては慈愛に満ちた態度を以て接せられ、随分厄介な申出をも聴かれ、得意の諧謔を弄しつつ学生を相手に議論などもせられた。随つて学生も学長先生として慈父に対するやうな心安さを感じてゐた。伯は政躬多忙なるにも係らず、学生の催す弁論部の地方講演等にまで出席して講演せられたことも度々であつた。長途の汽車旅行は、若い者でも閉口するのに、伯の旺盛なる元気は実に人をして感嘆せしめたものであつた」（『拓殖大学百年史－大正編』拓殖大学、平成22年7月）

本学経営の面で後藤が残した業績として画期的なものの一つを紹介しておきます。大正7年（1918）に大学令が制定され、その一環として私立専門学校の大学への昇格が可能となりました。しかし、それにはいくつかの厳しい条件が付せられ、一番厄介な問題は、多額の供託金を要求されたことでした。この時期に大学に昇格した私立専門学校に共通した悩みでしたが、本学は後藤の名声により、当時50万円、現在価値に引き直しますとゆうに100億円に相当する金額を、台湾の製糖会社から寄贈してもらって、この難題を切り抜けたのです。大正9年（1920）9月、後藤は東洋協会会長として次②のような募集趣意書を各製糖会社に出したのですが、これに各製糖会社が応じたという次第であります。後藤の台湾経営の成功が翻って本学をも潤したことを示す一例だということができましょう。

②●「余は昨年二月不肖を以て本会会長の重責に当り、先輩桂公等の遺志を継承し、益々本会の事業を完成し、以て時運の要求に応ぜむことを期せり。…東洋各地に於ける公私の業務に従事すべき人材を養成するは、刻下に於ても最も必要なる事項なるを以て、従来経営し来れる拓殖大学に大なる改善を加へ、以て其面目を一新せむことを期せり。…本会が時運の進歩に対応し、進んで是等事業並に施設の発展拡張を図るは、実に本会の使命にして而して又余の責任なり」（『拓殖大学百年史－大正編』拓殖大学、平成22年7月）

後藤と本学学生との深い縁を伝えるエピソードとして紹介しておきたいことがあります。後藤は、革命後のロシアとの関係修復に熱意をもち、日露協会会頭を勤め、また日露協会学校（後にハルビン学院として知られる）の創設にもかかわりました。後藤はこのハルビン学院の第3回目の卒業式に参列するために大正14年（1925）3月に当地に向かったのですが、この20日ばかりの旅程の間に、満鉄路線各地で働く学友の約150人と面会したと伝えられています。満鉄沿線各地とは、釜山、京城、平壌、ハルビン、長春、奉天、撫順、按山、大連などです。この出会いを通じて学友同士もまた異国で絆を強めていったらしいのです。

こんなことを話していると、桂太郎と後藤に関する、時代が十数年遡りますが、もう一つの次のようなエピソードを思い起こします。明治45年（1912）7月、本学の創設者である桂太郎が、日本の満州経営についての理解をロシアから得るために、後藤と若槻礼次郎をともないシベリア鉄道に乗ってロシアに向かったことがあります。しかし、桂、後藤、若槻がサンクト・ペテルブルクに到着するや、迎えに出た駐露大使より明治天皇のご病気が重篤である旨を知らされ、踵を返して同じくシベリア鉄道で帰国の途に着くというできごとがありました。

この往復の旅程でも、後藤は学友と頻繁に接触していたのです。当時、長春から本学に寄せられた一人の学友の便りには次（③）のような下りがあります。

③●「（桂学長閣下は）〝皆は元気で働て居るか、何分斯う云ふ場合で緩つくり皆に談も出来ないが、皆に宜敷言つて呉れ。こゝに何人居るか、九人、皆元気で働て居るかどうか、学校の名誉を落さぬ様精出してやつて貰度い、皆に伝へて呉れ〟と仰せられ、後藤男爵を願み〝これはうちの者で戦争に出て勲章を貰つて居る、今こゝで働ている〟など、紹介せられ、後藤男爵よりは〝マー精出してお遣りなさい〟との御挨拶に預り、当地同窓は一同例乍ら校長閣下の御温情を感佩致居り候。超へて八月七日御帰路の送迎に際しても再び両総代（代表二人の学友）車中に引見せられたるが、〝急で帰ることになつて…〟と暫時伏目の御顔容なりしも又両氏を列車の貴紳に紹介せられたる等、実に閣下が鞅掌多端の間も尚ほ学校並に出身者の前途を思はるゝの深大なるを拝察するに足るべくと存候」（『拓殖大学百年史－明治編』拓殖大学、平成22年3月）　以下次号